

トルコ北西部地震・緊急救援委員会 第4次派遣団帰国報告

事務局: 〒650-0044 神戸市中央区東川崎町7-2-6被災地NGO協働センター内
Tel 078-685-0068 Fax 078-685-0071 http://www.pure.co.jp/~ngo/



デュズジェの商店街。

8月17日地震以後、テント生活も落ちついてきた頃に11月12日またM7.2の地震がボル県デュズジェ市を中心で発生しました。今77,000人の人口が約40,000人に減少しています。デュズジェ市の一角は「全滅」という悲惨な状態です。この地域は、標高が高い夜はマイナス8度まで下かります。敵寒の中でのテント生活は想像以上の中のあります。阪神・淡路大震災後の状況でいうと、公園や学校のグラウンドで、毛布にくるまって避難していましたあの避難所生活が始まりたという感じです。一見、何事もなかったように各々がテント生活を送っていますが、今後の長い復興過程を想像すると、厳しい生活が待ち受けていることは間違ひありません。

…2度目の被災地“デュズジェ”に支援をお願いします!!…

<NGOs KOBE・イスタンブル メンバー紹介>			
	シンナン・アイドル (日本語ガイド)		岩城あすか (留学生)
	アルパハン・タナー (日本語ガイド)		オーズハーン・アルフ (日本語ガイド)
	カディル (医学生)		高谷尚史 (旅行社勤務)
	セダット (日本語ガイド)		

【行程】

<11/27>
・第4次派遣団先発隊(仲江川・西田)出発
・NGOs KOBE・イスタンブル(以下N.KI)のメンバーとミーティング
<11/28>
・デリンジェ現地視察
・「市民文化教育センター(仮称)」についての話し合い
・デュズジェ現地視察(第5テント村など)
<11/29>
・クリスマス(危機管理センター)にて情報収集
・電力会社を訪問(テント村への電気工事の交渉)
・DEKMAKミーティング
<11/30>
・第5テント村・戸別訪問
・物資倉庫整理
・カイナシユル村視察
<12/1>
・COCにて情報交換
・N.KIメンバーとミーティング
<12/2>
・デリンジェ市ヤブズスルタン地区にて情報収集
<12/3>
・デリンジェ「愛と望みのテント」訪問
・第4次派遣団後発隊第1班(佐々木・岩垂・平野)と合流
<12/4>
・デュズジェ・第5テント村視察
・アダバザルアドエリ工村・神戸仮設村視察
・後発隊第2班(村井・草地)と合流
<12/5>
・デリンジェ・ショッピングセンター前テント村を中心に視察
・「愛と望みのテント」の劇鑑賞
・DEKMAK事務所にて会合
・デリンジェ市長・助役と会合
<12/6>
・デュズジェ・第5テント村視察
・アダバザルアドエリ工村・神戸仮設村視察
・後発隊第2班(村井・草地)と合流
<12/7>
・デリンジェ・ショッピングセンター前テント村を中心に視察
・「愛と望みのテント」の劇鑑賞
・DEKMAK事務所にて会合
・デリンジェ市長・助役と会合
<12/8>
・DEKMAK・ヤブズスルタノ地区住民と話合い
・デリンジェ市内仮設住宅団地視察
・「白いハート」落成式
・DEKMAK・ヤブズスルタノ地区住民と話合い
・村井・草地帰国
<12/9>
・イスタンブル出発→日本へ
<12/10>
・帰国

【デュズジェ編】

1999年11月12日午後19時頃、ボル県デュズジェ市を震源地とするM7.2の地震が発生。デュズジェ市はイスタンブルから約200キロに位置し、まわりを山(ボル山)に囲まれた盆地という地形。8月17日の地震でもこの地域で約200名の死者を出し、すでにテント生活を送っていた人たちも多い。もともと人口は約7,000人であったが、今回の地震で、約40,000人に減少した。今回の地震で1,200世帯がこの町を離れたとのこと。(デュズジェから車で20分くらいのところにカイナシユル村があり、ここは「カイナシユルがテント村になった。」といふらしい住民のほとんどがテント生活をしている。デュズジェの特徴である、政府や市かで「もう大丈夫だから元の家に戻るなさい。」と言わせて戻った人たちの90%が亡くなってしまったこと、この時、戻るために使っていたクスライのテントを返すと日本円で約3,000円が貰えたらいい。戻すに困った人の証言では「戻らなくてよかった。3,000円で命を亡くしたようなものだ。」としみじみ言っていたのが印象的である。)

今回の地震におけるデュズジェ市の被害は、死者約800名(現地の人たちは2,000人を下らないと言っている。)デュズジェ市の中心部付近の一角は全滅といふらの惨状である。8月の地震のあと復旧作業をしていた人たちも、政府や市かで「もう大丈夫だから元の家に戻るなさい。」と言わせて戻った人たちの90%が亡くなってしまったこと、この時、戻るために使っていたクスライのテントを返すと日本円で約3,000円が貰えたらいい。戻すに困った人の証言では「戻らなくてよかった。3,000円で命を亡くしたようなものだ。」としみじみ言っていたのが印象的である。

11/12地震以後のDEKMAKとNGOs KOBE・イスタンブル(略称N.KI)の対応

- ・地震発生直後の午後11時頃、デリンジェを出発し、デュズジェに向かう。
- ・13日午前2時ころに現地に到着。火災発生のため煙で前が見えない状態の中、とりあえず救出活動を始める。最初はテントを積んだトラックが中心部まで入れず待機していたが、やがて市の中に位置する「アタチュルク中央公園」に多くの被災者が果然と立ちくらんでいる光景に出会い、この公園にテントを設置する。(5基)
- ・公園には約400人が避難しておらず、テントが足らぬのでクリスマス(危機管理センター)と交換し、あと30基のテントを調達する。
- ・デュズジェ出身の医学生(イスタンブル大学)たちのテントで活動を始め、DEKMAKとN.KIがデリンジェから持っていた医薬品が役に立った。また彼と一緒にDEKMAKとN.KIは、妊婦さん2人を発見し、近くで医療活動の準備に入っていた日本の医療チーム(N.G.O.s KOBE・イスタンブルのメンバー入りを果たした。)
- ・DEKMAKとN.KIはテント村内に自治組織をつくり、テント村の運営システムを移行しながら後方支援にまわることにする。(もちろん、当分週末には様子を見に行く。)
- ・このテント村は「中央公園テント村」もしくは「第5テント村」と呼んでおり、自治組織(リーダーのMr.カディル(28才)・副リーダー男性1名女性1名を除く)で8名のスタッフがいる。(内1名は女性担当)
- ・デュズジェ市のクリスマス(危機管理センター)の敷地内にテントを張って活動している「COC」からは、おむつ・ペーパード・ミルク等を提供して貢い、DEKMAK・N.KIと「COC」との連携が始まっている。これは、現地駐在員として活躍していた横山葉子さん(SVA)のお陰である。その後各々(DEKMAKとN.KI)が交代で、11月末までデュズジェに入っていたがテント村の自治組織を作ることが出来たので、システム(テント村の名簿の管理や物資の管理・配布などを自治組織に移行しながら、基本的に12月から後方支援にまわる。のこと。

<CCCのデュズジェでの活動>

- ・被災者を地中海沿岸の避寒地に「一時避難」させるための斡旋
- ・ブルサなど温泉地に「入浴ソーラー」として運搬している。
- ・行政で運営している「物資倉庫」から直接物資をもらうことができるため、その物資をテントに配布している。ただし、小さなテント村まで配布するには手間かかるため、小さなテントを統合する手助けをしている。
- ・(第5テント村にも、物資の支援が来た。テント村の住民リーダー・カディルをCCCの現地スタッフにつなぎ、今後も連携をとるように依頼した。その日の夜、イスタンブルでCCCのリーダー達と交流し、デュズジェのこともお願いしてきました。)

<第5テント村周辺の様子>

アタチュルク中央公園は、市のほぼ中心に位置し、バザールや商店が周辺にあることから非常ににぎやかな空間である。その周辺では一部倒壊の地域もあるが我々が視察に行った12月12日(地震発生から約25日経過)は、「ほとんどここで地震があったのか?」と錯覚をするほど、正常に動いていた。公園の一角にアタチュルクの銅像が建っており、また公園内には約200軒ほどの店舗の「チャイ飲み場」があり、ここは倒壊をまぬがれこの日も多くの人々が駆けつけている。その近くで以前開設していたJICAの医療テントも、現地の仮設診療所として使用されているとのこと。公園内にある「チャイ飲み場」は倒壊してしまったので水とトイレはそこを使用し、炊き出しはアダバザルの花火会場が直後からずっと提供してくれている。

市内を視察していると、通りすがりの女性3人が急に我々の前に立ち止まり、「ボル山に水が溜まっていると聞いた。これはまた地震が来るということか?」と尋ねてきた。我々が日本人の専門家と思っての質問だと推測できるが、それほど予震に対する恐怖感があるということが理解できる。

<第5テント村でのNGOs KOBEの活動>

- ・第4次派遣団は、冬対策として「湯たんぽ」を少し持つて、現地でモニターを行っている。

『湯たんぽについて』

湯たんぽは大地を大変感触がよく、輸送の問題があるが前向きに検討したいと思うテントには、ガストーブが配布されているが、木製の小屋でしているところは「木炭ストーブ」を置いている。暖をとるには、この方法が今のところ一番効果がある。でもこの第5テント村では、まだほとんどがテントなのでとりあえず「湯たんぽ」でもあればと思った。

(ちなみに第2次派遣団の時に視察したアダバザルのテント村は、ほとんどが木製の小屋に変わっていた。どの家庭にも「木炭ストーブ」が置かれていた。)

この第5テント村には約100人の子どもたちがいて(女の子の比率が高い)、第4次派遣団のY.M.C.A.チーム(熊本Y・広島Y)が折り紙を使っての遊びを教え、人気を独占していた。

<カディルとの懇談(草地、村井、仲江川、イスタンブル支部1人、カディル)>

地震後、約20日の時期なので、混乱もしているが、デリンジェチームの応援もあり、比較的のスムース。しかし、近々テントの撤去命令が出される可能性もあるので、今後このテント村の自治組織が何をしようと話し合ってもらいたいと思つた。行政の方から仮設住宅への斡旋(ではない)にはアタチュルク中央公園にはアタチュルクの銅像が建っており、その周辺は綺麗にしておきたい。」とのこと。

④懇談の内容

- 1. カディルはまだ若いので、もっとテント村の自治組織のスタッフを増やすこと。
- 2. テント村を4~5ブロックに分け、フロッグリーダーを置くこと。
- 3. カディル自身が自ら何でも動くのではなく、役割の分担化を図ること。
- 4. カディルの仕事は、他の市民活動団体(COC)や地元にできる団体等との連携や行政(デュズジェ市やボル県)との連携を追究すること。同時にカディルが信頼できるパートナーを早くスタッフから見つけて、サブにすること。
- 5. NGOs KOBEが後方支援し易いような地元のNGOをつくること。例えば、この第5テント村とCOCのDEKMAKとN.KIとのネットワークを実質的に形成すること。
- 6. 復興の過程は長いので、目前の物資のことだけに振り回されることなく、カディルは一步先のことを常に考えておくこと。

以上のようなことを話し合った。

我々はこのテント村のことを支援し続けること、また「CCC」の本部にもサポートするよう話を伝え、別れる。カディルには「あなた達は神様だ! 私たちは見捨てないで下さい。」と言われた。8日にN.KIを通して日本円で110万円の支援を決定し、預けた。この資金の管理はN.KIがする。

【デリンジェ編】

今回は、前回第3次派遣団である程度の支援プロジェクトが内定していたが、それについての進行状況を中心に確認してきた。

1. DEKMAKをカウンターパートとしてヤブズスルタン地区全域の冬対策について
2. 「市民文化教育センター(仮称)」の建設支援
3. 「愛と望みのテント」の活動支援

<ヤブズスルタン地区全域の冬対策>

ヤブズスルタン地区のテント村の状況を、主にショッピングセンター前(S.C.前)のテント村で話を聞いた。ここは、テント村と言ふよりもほとんどが「バラカ(木造の小屋)」になっていた。しかし、全体の1/3がまだテント生活をしている。(テントは冬用でない)住民の人に話を聞くと、自力でこのバラカを建てしかねない。(ちなみに建設費用は約180,000円)このバラカは、S.C.前だけではなく、ヤブズスルタン地区全域で数多く見ることが出来たが、あるテント村は「文字通りテント村」で、バラカが1つもみどころもあった。(ちなみにデリンジェ市内で仮設住宅地2000戸の建設が終了している。特に行政の方から仮設住宅への斡旋(ではない)を通じて、DEKMAKとN.KIが常任委員会をつくり、何が必要なのかリストに基づき検討し、最大400万円以内で購入し、配布することになった。)

DEKMAKもN.KIも現地に入ったためにリストアップが止まっていた。12月7日(19:00~)、12月8日(12:00~、20:00~)の3回、NGOs KOBE、CCC、N.KI、DEKMAKのメンバーと一緒に現地視察を行った。最後の3回目の時には、ヤブズスルタン地区的13のテント村の代表を含む、なんと500人近くが集まった。

その中で確認したこととは、以下の通り。

・NGOs KOBEとしては、冬対策のために必要なものを最大400万円以内で出来るだけたくさん用意したい。

・12月18日までに、ヤブズスルタン地区的テント村を調査しリストを作成する。(約20の住民ボランティアとCCC、イスタンブルの大学生も調査協力)

・12月19日にそのリストが、N.KIからKOBEに届く。

・12月21日から一週間で全地域に配布。

・領収書等、報告書をまとめて12月31日までKOBEへ提出。

簡単に参加者の方に、冬対策に一番欲しいものを聞いてみると、冬用テント、ストーブ、毛布、冬用の服が圧倒的に多く、その他にはトイレ、シャワー等の衛生面での不安を訴える人や、子ども達に安心して遊べるスペースを、と言う声もあった。

この第5テント村には約100人の子どもたちがいて(女の子の比率が高い)、第4次派遣団のY.M.C.A.チーム(熊本Y・広島Y)が折り紙を使っての遊びを教え、人気を独占していた。

冬対策について、冬対策として「湯たんぽ」を少し持つて、現地でモニターを行っている。

『湯たんぽについて』

湯たんぽは現地で大変感触がよく、輸送の問題があるが前向きに検討したいと思うテントには、ガストーブが配布されているが、木製の小屋でしているところは「木炭ストーブ」を置いている。暖をとるには、この方法が今のところ一番効果がある。でもこの第5テント村では、まだほとんどがテントなのでとりあえず「湯たんぽ」でもあればと思った。

(ちなみに第2次派遣団の時に視察したアダバザルのテント村は、ほとんどが木製の小屋に変わっていた。どの家庭にも「木炭ストーブ」が置かれていた。)

この第5テント村には約100人の子どもたちがいて(女の子の比率が高い)、第4次派遣団のY.M.C.A.チーム(熊本Y・広島Y)が折り紙を使っての遊びを教え、人気を独占していた。

この第5テント村には約100人の子どもたちがいて(女の子の比率が高い)、第4次派遣団のY.M.C.A.チーム(熊本Y・広島Y)が折り紙を使っての遊びを教え、人気を独占していた。

この第5テント村には約100人の子どもたちがいて(女の子の比率が高い)、第4次派遣団のY.M.C.A.チーム(熊本Y・広島Y)が折り紙を使っての遊びを教え、人気を独占していた。

この第5テント村には約100人の子どもたちがいて(女の子の比率が高い)、第4次派遣団のY.M.C.A.チーム(熊本Y・広島Y)が折り紙を使っての遊びを教え、人気を独占していた。

この第5テント村には約100人の子どもたちがいて(女の子の比率が高い)、第4次派遣団のY.M.C.A.チーム(熊本Y・広島Y)が折り紙を使っての遊びを教え、人気を独占していた。

この第5テント村には約100人の子どもたちがいて(女の子の比率が高い)、第4次派遣団のY.M.C.A.チーム(熊本Y・広島Y)が折り紙を使っての遊びを教え、人気を独占していた。

この第5テント村には約100人の子どもたちがいて(女の子の比率が高い)、第4次派遣団のY.M.C.A.チーム(熊本Y・広島Y)が折り紙を使っての遊びを教え、人気を独占していた。

この第5テント村には約100人の子どもたちがいて(女の子の比率が高い)、第4次派遣団のY.M.C.A.チーム(熊本Y・広島Y)が折り紙を使っての遊びを教え、人気を独占していた。

この第5テント村には約100人の子どもたちがいて(女の子の比率が高い)、第4次派遣団のY.M.C.A.チーム(熊本Y・広島Y)が折り紙を使っての遊びを教え、人気を独占していた。

この第5テント村には約100人の子どもたちがいて(女の子の比率が高い)、第4次派遣団のY.M.C.A